ミュージアム通信

小川原脩記念美術館　☎21-4141
観覧料：一　般　500円（400円）
高校生　300円（200円）
小中学生　100円（50円）

倶知安風土館　☎22-6631
観覧料：一　般　200円（100円）
高校生以下、美術館観覧者無料

開館時間は9時～17時
入館は16時30分まで
※（　）内は10名以上の団体料金
6月の休館日　毎週火曜日

展覧会のお知らせ

■第1展示室

小川原脩展　生誕110年記念「小川原脩 1911-2002」

当館が所蔵する小川原作品は、およそ700点。1930年代の美校時代のリアリズムから80年代以降の自然と人間が交歓するアジアの大地にいたるまで、小川原が向き合ったテーマは多岐にわたります。画業の全容を、時代背景とともに一望します。

会　期：開催中～7月11日㈰

■第2展示室

小川原脩挿絵展「蝦夷残侠伝」

1974～75年にかけ雑誌「月刊ダン」に連載された倉島齊の時代小説『蝦夷残侠伝』の挿絵36点。小川原には珍しい水墨画風で、人物描写も多いこの挿絵は、新たな魅力を伝えてくれるでしょう。

会　期：開催中～7月11日㈰

アート・イベントのお知らせ

■土曜サロン

世界のグレートアーティスト（12）「華麗なる美の饗宴 フランス第二帝政」

日時：6月5日㈯14時～15時　会場：映像ルーム（無料）
お話：柴 勤（館長）

絵画で楽しむパリの情景（3）「夜をさまよう ロートレック」

日時：6月12日㈯14時～15時　会場：映像ルーム（無料）
お話：柴 勤（館長）

ユネスコ世界遺産（10）「生命の営み」

日時：6月19日㈯14時～15時　会場：映像ルーム（無料）
お話：柴 勤（館長）

おとなの手しごと～おもしろ・かんたん版画

今回は、身の回りにある素材で版画の制作に挑戦！
日時：6月26日㈯14時～16時　会場：ロビー（無料）
お相手：沼田 絵美（学芸員）　定員：10名 ※要予約

■金曜ナイトサロン

「美術館でフランス語～ゼロからの旅立ち⑤・⑥」

美術の世界にはフランス語が満ち溢れています。作品タイトルや作家名など読み方を知るだけでも楽しみは一気に広がります。
日時：⑤6月4日㈮　⑥6月18日㈮　各18時～19時
会場：映像ルーム（無料）　お話：柴 勤（館長）
定員：5名程度　※要予約

倶知安風土館イベントのお知らせ

■倶知安風土館いきもの調査隊 in 百年の森（調査会）「ヒナコウモリの個体数調査会」

日時：6月21日㈪18時～20時30分　定員：なし（※予約不要）　場所：百年の森公園（現地集合）
講師：宮崎 守（百年の森管理人）、小田桐 亮（学芸員）　参加費：無料　持ち物：虫よけスプレー、カメラなど

■ふるさと探訪（観察会）「春の大谷地湿原と大沼でスミレを見比べよう」

日時：6月26日㈯9時～13時　定員：8名（※要予約・先着順）場所：ニセコ連峰 大沼（集合：神仙沼P）
講師：古市 竜太さん（マウンテンガイド・コヨーテ主宰）　参加費：250円（保険代）

「美術は楽しい！」

つい先月、小樽で気持ちの良い展覧会が行われていました。その名も「朝里川 桜咲く 現代アート展」。

公園と隣接する町民会館を会場とする紛れもない現代美術の展覧会で、屋内外には阿部典英さんを始めとする地域ゆかりのハイレベルな作品がずらり。それでいて、とても親しみやすい。それもそのはず、仕掛け人は地域の「まちづくりの会」。つまり、住民の間から生まれた展覧会なのです。ボランティアの方々が会場を温かく見守り、すぐ横では遊具で遊ぶ子どもたちの歓声が。

生活の中の美術、そんな和やかな雰囲気に包まれていました。

館長　柴（しば） 勤（つとむ）

感動の場 ー点

『蝦夷残侠伝 さし絵』
（連載第6回目、月刊ダン2巻11号掲載より）

1974年　小川原　脩　画

1974年に描かれた小川原脩の作品全般を見渡してみると、「群化社会」と題して十数頭が一塊となった犬たちをはじめ、ひたすらに犬が登場します。まさに小川原が「動物の画家」と呼ばれた時代です。

ところが、同年に連載された『蝦夷残侠伝』のさし絵では、江戸から越後へと舞台を移しながら、幕末維新の時代を生きた人物の描写がほとんどです。その中から今回は、越後長岡藩士の河井継之助の肖像を紹介します。この実在した人物は、同じ姿形の肖像写真（長岡市立中央図書館所蔵）が残っており、小川原もこの資料を参考にしたと思われます。史実を土台にしたフィクションの本作においても、主人公・与惣次を導く力強い視線など、この物語ならではの河井継之助の人物像を印象づける風貌で描き出しています。

油彩画では犬の群れの大作に挑む一方で、毎月の連載さし絵では人の喜怒哀楽を表現していたという意外性は、小川原の画業をひもとくうえでも注目に値するでしょう。

文：沼田　絵美（小川原脩記念美術館　学芸員）

ふるさと探訪

子育てを忘れた鳥―カッコウ―

458回

多くの人が鳴き声を聞くだけで何が鳴いているかわかる鳥「カッコウ」。その特徴的な鳴き声はそのまま鳥の名前になり、英語では「Cuckoo」と呼ばれます。ユーラシア大陸とアフリカに広く分布していて、冬をインドや中国南部で過ごし、夏鳥として5月から7月に日本中にやってくる渡り鳥です。昔から霜が降りにくくなる頃に鳴くことから「カッコウが鳴いたら種を（豆を）蒔く」と言われ「種まき鳥」とも呼ばれています。大きさは35㌢ほどで、頭から背面にかけて青灰色で腹面には細く黒いしまが入ります。主に昆虫を食べ、他の鳥や動物が好まない毛虫を食べるので、農業害虫を減らしてくれるありがたい存在です。

カッコウは自分では子育てをせず、オオヨシキリ、モズ、セキレイ類、ウグイス類などの小鳥の巣に卵を産んで育てさせる「托卵（たくらん）」という習性を持っています。宿主の巣が留守になる隙をみて卵を1個抜き取り、自分の卵を1個産み付けます。先にかえったヒナは小鳥（宿主）の卵を巣の外に放り出して、エサを独り占めして育ちます。宿主の鳥は自分の子どもがすり替わっていることに気づかずに子育てをしますが、なかにはカッコウの卵を認識し、突っついて穴をあけて巣から放り出す宿主がいます。

繁殖成功率は16％ほどと高くなく、托卵は決して有利な繁殖戦略とはなっていないようですが、カッコウは巣作りや抱卵といった子育ての習性を失っていて、托卵する以外に子孫を残す方法がありません。なぜそうなったのか理由を聞いてみたいですね。

文：森脇　友行（倶知安風土館　学芸補助職員）